

北海道青少年育成大会（「少年の主張」全道大会）
—こども・若者応援のつどい—

主催 北海道青少年育成協会 北海道 国立青少年教育振興機構



令和7年度

「少年の主張」全道大会

発表作品集

伝えたいわたしの想い。届けたいあなたに。
～言葉を越えた感情の交差点～



公益財団法人北海道青少年育成協会

北海道

独立行政法人国立青少年教育振興機構

目 次

1 はじめに

公益財団法人北海道青少年育成協会会長 山谷 吉宏	2
--------------------------	---

2 講 評

審査員長 吉本 将樹 (北海道中学校長会副会長/札幌市立稲穂中学校校長)	3
--------------------------------------	---

3 作 品 集

【最優秀賞】

北海道知事賞

私の挑戦 ふるさとを守るために	横峯 桃子 (根室市立厚床小中学校 9 (3) 年)	6
-----------------	----------------------------	---

【優秀賞】

北海道教育委員会教育長賞

そろばんでつながる未来	三浦かりん (札幌市立稲積中学校 2年)	7
-------------	----------------------	---

北海道PTA連合会会長賞

「障がい者」との向き合い方	渡部 詩乃 (網走市立第三中学校 3年)	8
---------------	----------------------	---

北海道青少年育成協会会長賞

「違うってそんなにいけないこと？」	神永みそら (羽幌町立羽幌中学校 3年)	9
-------------------	----------------------	---

【奨励賞】(地区順)

言葉でつなぐ、未来への想い	池下 美緒 (長沼町立長沼中学校 3年)	10
---------------	----------------------	----

世界で一番きれいな言語	小林ななみ (恵庭市立恵み野中学校 3年)	11
-------------	-----------------------	----

人生を変える本	山崎日菜香 (倶知安町立倶知安中学校 2年)	12
---------	------------------------	----

未来をつくる、その一歩	江草 優果 (白老町立白老中学校 2年)	13
-------------	----------------------	----

『私を生きる』	幕田 安寿 (様似町立様似中学校 3年)	14
---------	----------------------	----

「大事にしたい、真っすぐな想い」	青木 葵 (北斗市立茂辺地中学校 1年)	15
------------------	----------------------	----

「行動」して花を咲かせて	飯田ころこ (江差町立江差中学校 2年)	16
--------------	----------------------	----

ファーストペンギン	西隈 樹里 (東川町立東川中学校 3年)	17
-----------	----------------------	----

故郷が教えてくれた「本当の豊かさ」	池田 梓 (枝幸町立枝幸中学校 3年)	18
-------------------	---------------------	----

東日本大震災を胸に刻んで	松本 美海 (帯広市立帯広第五中学校 2年)	19
--------------	------------------------	----

なりたい自分になるために	對木 亜香 (白糠町立茶路中学校 3年)	20
--------------	----------------------	----

手を差し伸べて	新井優理香 (札幌市立山鼻中学校 2年)	21
---------	----------------------	----

4 参 考

令和7年度「第47回少年の主張全国大会～わたしの主張2025～」内閣総理大臣賞受賞作品	22
---	----

5 資 料

大会のねらい/大会のあらまし/審査員	23
--------------------	----

令和7年度「少年の主張」総合振興局・振興局地区大会開催状況	24
-------------------------------	----

令和7年度「少年の主張」実施要領	25
------------------	----

「少年の主張」全道大会歴代最優秀賞並びに優秀賞受賞者名簿	26
------------------------------	----

はじめに

8月29日（金）に令和7年度「少年の主張」全道大会を開催いたしました。

この大会は、少子高齢化、国際化、情報化の急速な進展等、社会や国際的な環境が大きく変化する現代社会にあって、次代を担う少年には、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力などを身につけることが大切であることから、これらの契機となるよう、少年が社会に向けての意見、未来への希望などを発表する機会を設けるとともに、あわせて、少年の健全育成及び非行防止に対する道民の理解を深めることを目的として開催しました。

今年は、道内278校から21,531名の応募があり、地区大会を経て、16名の方が全道大会に進みました。

中学生が、自身の経験から得た想いや考え、感謝や感動、将来への決意など自分の言葉で表現した主張は、多くの方の心に届き、言葉を越えた感動を届けたことと思います。

大会中の新たな取り組みとして、司会やライブ配信、写真撮影など大学生が運営に協力し、中学生をサポートしてくれました。また、初開催した大学生の進行による座談会では、大会に出場した感想や体験談についてお互いの思いを聞き、大学生の皆さんが大切にしていることや考えを話し、中学生へエールを送りました。

ご協力いただいた大学生の皆さんにお礼申し上げ、今後の活躍を応援しております。

この発表作品集は、全道大会で発表された16作品をはじめ、全国大会で内閣総理大臣賞を受賞された作品を掲載しています。一人でも多くの方にご覧いただくと幸いです。

最後に、本大会を開催するに当たり、多大なご協力いただいた関係の皆様にご心から感謝を申し上げます。

令和7年12月

公益財団法人北海道青少年育成協会

会 長 山 谷 吉 宏



全 体 講 評

本日の大会に参加された皆さんに、まずは心からの拍手を送ります。大勢の前で自分の思いを言葉にして伝えることは、決して簡単なことではありません。緊張や不安を乗り越え、堂々と発表された皆さんの姿は、聴く人の胸を熱くし、大きな感動を与えてくれました。

どの発表にも共通していたのは、自分自身の体験を大切にし、そこから感じ取った思いや願いを誠実に語っていたことです。日常の中の気付きや喜びを丁寧に言葉にした人もいれば、様々な経験を通して自分を見つめ直した人、社会の課題に目を向けて将来の夢や生き方を語った人もいました。その一つ一つに皆さんの「等身大の思い」が込められており、聴いている私たちは心の奥に温かな共感を覚えました。

人前で自分の思いを語ることには、大きな勇気が必要です。しかし、『君たちはどう生きるか』で知られる吉野源三郎は、その著書の中で「自分が心から感じたことや、しみじみと心を動かされたことを、くれぐれも大切にしないではいけません。」言い換えれば、「常に自分の体験から出発して正直に考えることが大切だ。」と語っています。自分の感じたことや心を動かされたことを言葉にすることは、自分自身をより深く理解するきっかけとなり、これから皆さんが社会の中で歩いていくときに必ず役に立つはずです。

また、今日の発表から私が強く感じたのは、「一人ひとりの体験が、誰かの心を動かす」ということです。特別な出来事でなくても、皆さんが日々の生活の中で抱いた正直な気持ちや気付きは、聴く人に新しい問いを投げかけます。だからこそ、どうかこれからも自分の思いを大切に、言葉にし続けてください。その積み重ねが、皆さん自身の未来を照らし、社会全体を明るくしていく力になるのです。

私を含め本日の参加者の皆さんは、互いの発表を聴いて、多くの刺激と示唆を得ることができ「心を動かされた」と思います。せっかく全道各地から参加し、この大会で出会えたのですから、お互いに積極的に声を掛け合い、「あなたの発表に興味をもちました」「ここをもう少し教えてください」などと、意見の交流をしてみてもどうでしょうか。今では、実際に会わな

くても、インターネットを介してリモートで交流することも、簡単にできると思われますので、是非実現してほしいと思います。今回の大会の参加によって出会えた新しい仲間との温かい交流の先に、きっとさらに広い世界が見えてくることでしょう。

この大会に至るまで、発表者の皆さんを支えてくださった先生方やご家族の存在も忘れてはなりません。支えてくれる人がいて、信じて応援してくれる人がいるからこそ、安心して自分の思いを語ることができたのだと思います。その温かな支えに感謝の気持ちを忘れずに、これからも歩いていってください。

本日発表された皆さんは、すでに大きな一歩を踏み出しました。その勇気と努力を自信に変え、これからの学校生活、そして将来の夢につなげていってほしいと思います。自分の思いを素直に語り、互いの言葉に耳を傾けること。それこそが、よりよい社会を築いていく第一歩になるのです。

さて、審査については、論旨を5観点、論調3観点の計8観点を5人の審査員で審査しました。皆さんの真摯な思いに応えるべく、我々審査員も原稿を何度も読み込み、発表者への尊敬の念を抱きながら、内容の理解に努めてきました。

最優秀賞を受賞された、厚床小中学校の横峯桃子さんの主張は、ふるさとを守るために地域の活性化に向けて自ら行動し、様々なイベント等を企画し実施したという大人顔負けの行動力に裏付けされた、説得力のある素晴らしい内容でした。また、優秀賞の3人の皆さんにつきましても、最優秀賞とは僅差であり、奨励賞になった12人の皆さんも立派な主張でした。

結びになりますが、お子様の大会出場を温かく後押ししていただいた保護者の皆様、御指導をいただきました先生方、各学校単位において参加していただいた中学生の皆さん、大会運営に携わっていただいた多くの関係者の皆様に御礼を申し述べ、全体講評とさせていただきます。

個人講評（発表順）

1 世界で一番きれいな言語

小林 ななみ

世界で一番きれいな言語は「手話」であるということが述べられています。理解しよう伝えようという意志があって成り立つ言葉で、これこそがコミュニケーションの根本であり、人と人がかかわる上で最も大切なことであるため、「手話」が世界で一番きれいな言語であると主張しています。日常の何気ないことから自らの考えを広げ、さらに行動を起こすことで考えを深めており素晴らしい主張です。

2 『私を生きる』

幕田 安寿

思春期特有の「周りの目」を気にし過ぎてしまう悩みについて述べられており、同年代の多くの人が共感する内容だと思われます。「本来の姿を出せば孤独になってしまう」と思っていたが、それは間違いであり、むしろ同じ思いを持つ人と出会うための第一歩だった」ということに気付けたことはとても素晴らしいことです。他者の意見や期待を「選択肢の一つ」と考えられるようになったことも大きな成長です。

3 東日本大震災を胸に刻んで

松本 美海

東日本大震災での祖母の体験談を聞いて考えたことを中学生らしい素直な気持ちで述べています。「もしも」のことを考えておくことは生きていく中で全ての基盤になり、災害を他人事のように捉えず、先を見据えて生きる事の大切さをしっかりと祖母から伝えられたことでしょう。そして、今後は大切な人を守っていくため、祖母の代わりに自分が語り継いでいくと決意をしたことはとても立派です。

4 「違うってそんなにいけないこと？」神永 みそら

「多様性」について、「社会は本当に違いを大切にしているのだろうか」という疑問について、自分の考えを中学生らしい素直な気持ちで述べています。特別扱いが見えない壁をつくっている、という考えにはとても共感します。「どうか自分を否定せず、ありのままの自分を信じてください。」「あなたのままで、大丈夫。」という言葉は、多くの中学生に勇気を与え、新たな一歩を踏み出す力となるでしょう。

5 「大事にしたい、まっすぐな想い」

青木 葵

日常生活の中で感じた「言葉」の意味について、しっかりと自分なりの考えを述べています。言葉のもつプラスの面とマイナスの面について、現在の世界情勢などにも目を向けている主張には、大人である私たちも考えさせられます。「言葉には、人を救う力がある。これから世界中の人を幸せに生きていく方法を考えていきたい。」と力強く決意を述べ、自分の将来の夢を具体的に語る姿勢はとても立派です。

6 故郷が教えてくれた「本当の豊かさ」池田 梓

「故郷の良さ」を再認識することで、本当の豊かさとは何かを述べています。ウルクアイの大統領の「私たちは発展するために生まれてきたわけではない。幸せになるために地球に生まれてきたのだ」という言葉には多くの人が感銘を受けるでしょう。「発展や便利さだけが幸せの基準ではない」ということは、今の社会では忘れられていることです。その部分にしっかりと焦点を当てたこともとても素晴らしいです。

7 「障がい者」との向き合い方

渡部 詩乃

障がいをもつ祖父母との生活を通して感じた「障がい者との向き合い方」について、自分の考えをしっかりと述べています。実際に身近で経験したことを基にした主張のため、とても説得力があります。「障がいのある、ないに関わらず、できないことをお互いに助け合う心がけを大事にしてほしい」という主張には、誰もが共感すると同時に、このような行動を取ることが大切であると、改めて考えさせられます。

8 なりたい自分になるために

對木 亜香

初対面の人と話すことが苦手だったことを克服した経緯について、自身の体験から分かりやすく述べています。人と関わることに對しての考えが「怖いもの」から「可能性を広げてくれるもの」と気付いたことは、とても素晴らしいことです。また、「行動を起こすことは楽しく、相手はこちらに寄り添い応援してくれる」という積極的な考えになったことも、自身の成長を感じる素晴らしい主張です。

9 私の挑戦 ふるさとを守るために 横峯 桃子

ふるさとを守るために、地域の活性化に向けて自ら行動し、挑戦してきたことを述べています。多くの人の力を借りながらも、様々なイベント等を企画し、それを実施することができた行動力は称賛に値します。その行動力があるからこそ、「地域の今を知り、未来を考える。そして、地域全体で問題を共有し、過疎化への解決策を考えていく必要がある」という主張に説得力があり、多くの人が共感することでしょう。

10 未来をつくる、その一步 江草 優果

我が国の「国政選挙」への投票率が低く、政治に興味をもつ人が少ないことについて、自分自身の考えを等身大の思いで述べています。日本社会に訴えたいことを「労働環境」「政治をより身近に感じるための工夫」「若年層が安心して生活できる政策の増加」の3点について、分かりやすい言葉で主張しています。中学3年生は、あと4年も経たずに選挙権を得るので、自分事として考えてもらいたい内容です。

11 言葉でつなぐ、未来への想い 池下 美緒

修学旅行で東日本大震災の被災地を訪問し感じたことについて、感受性豊かに繊細な気持ちで述べています。「生きていることが奇跡で、当たり前前の日常が当たり前ではない」ことに気付き、「大切なことを伝えるために言葉を使いたい」と考えるようになったことは素晴らしいことです。今後、語り部のように震災の記憶を誰かに伝えていき、日々の小さな幸せがどれほど尊いかを、是非伝え続けてほしいです。

12 そろばんでつながる未来 三浦 かりん

「そろばんで海外とつながる」という貴重な経験による心の変化や成長について、素直な気持ちで述べています。「メキシコそろばんプロジェクト」を立ち上げて、オンラインで英語を使いそろばんを教えることは、誰にでもできることではではありません。その行動力には頭が下がる思いです。これからも、この行動力を存分に発揮して、将来の夢を叶え世界の多くの国とつながり活躍することを期待しています。

13 手を差し伸べて 新井 優理香

障がいをもった姉と日常生活を過ごしている中で、気付いたことや感じたことを、中学生らしい等身大のまっすぐな思いで述べています。その姉と14年という長い年月をずっと一緒に生活し、様々な経験をしているからこそ、「今の私が社会に願うことは、困っているときにはスッと手を差し伸べてくれる環境であってほしいことだ」という、一見ごく普通に感じる主張であっても、説得力があるのです。

14 「行動」して花を咲かせて 飯田 こころ

日常の何気ない経験を通して、「行動」とは人生において必要不可欠な大切な行いであることを、分かりやすく例を挙げて述べています。日常生活の小さなことにも目を向けて、考えを深めていく姿勢は素晴らしいことです。「まずはやってみなくちゃ分からない。行動すれば何かは必ず変わるから。」という主張に背中を押されて、行動する勇気をもらい、自分という花を咲かせる人が増えることでしょう。

15 人生を変える本 山崎 日菜香

「人生を変える本」の存在について、自分の体験談をもとに述べており、多くの本を読んでもらいたという切実な思いが伝わってきます。「読んで損だった本など、この世にはなく、どんな本でも得られる知識や情報はあり、その知識や情報はいつか必ず役に立つ」と言い切るくらい、本から多大な影響を受けてきたことが伝わってきます。この発表を聞いた多くの人が、たくさんの本を手にするのを願っています。

16 ファーストペンギン 西隈 樹里

海外を含む様々な場所を転々と移住し、今の北海道の東川町に行き着いた理由について述べられており、東川町の魅力が手に取るように伝わってきます。また、短期留学などグローバルな交流の経験を通して、将来の夢を具体的にもてるようになったことは素晴らしいことです。「今後も多くの経験を積んで成長し、ファーストペンギンであり続けたい」という決意が強く感じられ、とても頼もしい限りです。



最優秀賞（北海道知事賞）

私の挑戦 ふるさとを守るために

根室市立厚床小中学校 9（3）年

よこみね ももこ
横峯 桃子

「ふるさと」と聞いて何を思い浮かべますか。生まれた場所や育った場所だけでなく、心のふるさとも思い浮かぶかもしれません。私のふるさは、北海道最東端の町、根室です。その中でも私の住んでいる地域、厚床は、自然が豊かで町が小さい分、住んでいる人のほとんどが顔見知りです。そのため、挨拶し合えたり、立ち話ができたり、安心して生活することができます。

しかし、根室は現在、人口がどんどん減少しています。二〇一五年に二万七千六百人だった根室市の人口は二〇二四年に二万二千五百人と約十年間でおよそ五千人も人口が減少しています。このままでは、新しく根室の学校に入学する子供が途絶えてしまい、いつか根室には子供が居なくなってしまうかもしれません。それだけでなく、新しく根室に住みたいと考える人も減っているのではないのでしょうか。このように、今、日本各地で住む人が減っていき、産業や交通などが衰退してしまう「過疎化」が問題になっています。

最近よく、耳にするSDGs。SDGsとは日本語で「持続可能な開発目標」と呼ばれる、二〇三〇年までに達成を目指す国際目標のことです。その中に「住み続けられるまちづくりを」という目標がありました。この目標こそが過疎化の改善に関わってくるのです。

私は、私が大人になったときに、根室を帰って来ることができる町にしたいと思っています。

そのために、私は地域活性化に関わって、私にできることをやろうと決意しました。

「厚床で、厚床の人との繋がりを創り、楽しい場を増やすこと」という目的で、今、厚床で防災イベントなどを行っている「とことこあっとこと」という団体があります。代表の方は、「文化や伝統も守りつつ、新しいものを取り入れながら、地域のために何かできる人を増やしていく。そうすると、人口減少が進んでも活気のある町として、過疎化は緩やかになる」という考えからこの団体を創設したそうです。私は、今年からそのメンバーに加わり、「地域を残していくには、この問題を地域全体で共有するべきだ」と考えました。そのためには、まず地域の交流の場が必要です。私は、ア

ンケートを取った結果から、学校の大きなスクリーンを使って、ゲーム大会をするという提案をしました。ゲーム大会なら地域の小中学生が興味をもって地域のイベントに参加してくれると思ったからです。

校長先生をはじめとするたくさんの方にサポートをしていただいて、六月に厚床eスポーツ大会を開催することができました。学校が会場なので、企画書を作って教育委員会にプレゼンをしに行ったり、イベント開催のチラシを制作したり、ゲーム機やプロジェクターの接続を試行したりして準備しました。当日は、厚床地域の子供から大人まで約四十名が参加してくれました。工夫したことは、年の差関係なく、コミュニケーションをとって欲しかったのでチーム戦でゲームを行ったことです。他の人の観戦を楽しんだり、大きなスクリーンでゲームをしたりという、笑顔あふれる場をみんなで共有することができたと感じています。参加してくれた方から、「たくさんの人とコミュニケーションを取ることができて楽しかった」や「子供が中心となって、ここまで立派なイベントを開催したことに感動した」などの感想をいただきました。また、報道機関に取材していただいたことで私の活動を各地に発信することができたと思っています。

今回のイベントだけで厚床の過疎化が改善されるわけではありません。しかし、私の挑戦が評価されて、ふるさとを守るための確かな一歩を踏み出せたと感じています。このように未来を担う私たち若い世代が、新しい考えを取り入れながら地域のために行動していくことが今、求められています。

地域の今を知り、昔を知り、未来を考える。そして、地域全体で問題を共有し、過疎化への解決策を考えていく必要があると思います。それを行動に移していくことが、住み続けられるまちづくりのための第一歩なのです。私は私にできるやり方で地域を残していきたいです。

いつでも「ただいま」とふるさとに帰って来ることができるように。



優秀賞（北海道教育委員会教育長賞）

そろばんでつながる未来

札幌市立稲積中学校 2年

みうら
三浦 かりん

そろばんを習いたい人 この問いかけに、たくさんの手が上がった。その手は、明るい未来に向かっていているようだった。私はこの日を一生忘れない。

私と妹は昨年、数ヶ月学校を休み母に連れられてメキシコに行った。行く前は、すごく不安だった。本当にメキシコに行くの？勉強はどうするの？ネットには、メキシコは危ない国だと書いてある。心配する私に母は言った。

「やる気があれば勉強はどこでもできる。ネットが全て正しいとは限らないよ。自分達を目でメキシコのリアルを見てこよう。」

私達が連れていかれたのは、トラスカラ州にある公立中学校だった。私達三姉妹はそろばんを習っている。私がそろばんを弾いているのを見たトラスカラの中学校の先生に、そろばんを披露しにきて欲しいとお願いされたのだ。

トラスカラ州は、メキシコで最も貧しい州のひとつである。路上では、私くらいの子供が真っ黒になって信号待ちの車の窓を洗っていた。レストランでは、5歳くらいの子に

「お金ちょうだい」と声をかけられた。

公立学校は2部制にわかれていて、校内も野良犬がウロウロしていた。午前中は家事を手伝い、午後から学校に来る生徒もいる。そのせいか公立学校では数学の能力が低く英語を話せる生徒はほとんどいなかった。

先生は言った。

「子どもでも、一生懸命勉強すればこんなに素晴らしいことができるということを生徒に見せてほしい。君たちは、学びと教育が未来を変えるというモデルになれるんだ。」

私達は、小学校から大学までまわり、朝から晩までそろばんを紹介し、教えた。私達がフラッシュ暗算を披露すると、人々は信じられないと目を丸くした。

どうやって頭の中で計算しているの？たくさん質問された。私は7歳でそろばんを始め一日も練習を休んだ

ことがない。継続は力なりというそろばんの先生の言葉を信じて、毎日二時間は練習している。

そろばんの紹介が終わった時、小さな女の子がやってきておやつ代の二ペソをくれた。ある人はハグを、ある人はブレスレットをくれた。それぞれが私にわずかなものをくれることで感謝の気持ちを表現してくれた。

誰もが大金を持っているわけではない。それでも、私達は毎日誰かの家に招かれ、彼らができる最大限のもてなしを受けた。他人と分かち合うのがメキシコ流だった。

じゃあ、私にできることは何だろう ここにはそろばんを習いたい子どもがたくさんいた。私達は、メキシコそろばんプロジェクトを始めた。日本で使われていないそろばんをメキシコに送り、オンラインで英語でそろばんを教えるのだ。

そろばんは、そろばんさえあればどこでも誰でも素晴らしい計算力をつけることができる。そしてメキシコでは、英語ができると将来の可能性が飛躍的に上がる。こうやって能力を高め、路上で小さな頃から働かなくてはいけな子どもが減っていけばいいなと思っている。

メキシコに行ってから、好きなだけ勉強やそろばんができ、何の心配もなく学校に行けることがいかに幸せなのかを知り、私は今、勉強を頑張っている。

中学生の私には何もできないと思い込んでいた。だけど初めてだったけど特技のそろばんを紹介し、そろばんを教えてみんなが笑顔になった。

私にも、できることはある。メキシコそろばんプロジェクトを通じて、メキシコは怖い国ではなく、優しく愛にあふれた国だと知ってもらいたい。メキシコには、日本から友好の印として送られたハカランダというさくらにそっくりな木がある。

そろばんの技術をメキシコに伝え、そろばんを通じてこのハカランダの木のように日本とメキシコの架け橋になりたい。

私には獣医師になる夢がある。将来、この世界のどこかで彼らと同僚として働いたら何て素敵な未来だろう。そんな明るい未来を彼らと一緒に作っていきたい。



優秀賞（北海道PTA連合会会長賞）

「障がい者」との向き合い方

網走市立第三中学校 3年

わたべ うたの
渡部 詩乃

皆さんは「障がい者」と聞いてどんなイメージを持ちますか。自分たちとは違い、ちょっと変わってる人だと思える方がいるかもしれません。これから話すことで少しでも障がい者へのイメージが変わるといいなと思います。

私のおじいちゃんとおばあちゃんは生まれつき耳が聞こえません。家の中ではほとんど手話やお互いの口の動きをみて会話をしています。小さい頃から日常的に手話を使う環境で私も弟も育ちました。私が耳の聞こえない二人と暮らす上で大変なことは沢山あります。例えば、部活終わりに公衆電話でお迎えをお願いしたいときや急用をできるだけ早く伝えたいとき。表情や手話が見えない電話では連絡をすることができません。どうしても伝えなければいけないことがあれば仕事上の母に一度電話をかけて母からラインで伝えてもらっています。電話で直接伝えることができないのがとても不便です。他にも、一緒に飲食店などに行き注文をする時です。店員さんの話した言葉を二人に通訳するのですが、なかなか手話が伝わらなくて店員さんにも二人にも困らせてしまうことがあります。一緒に出かけて手話で話していると周りから変な目で見られることがたくさんあり、一時期そのことが原因で手話がいやになったり、手話でいちいち説明するのがめんどくさい、一緒に出かけたくないと思った時も正直ありました。今そのように思ってしまったことをとても後悔しています。今年の一月におじいちゃんが脳幹出血で倒れました。入院し、家にいなくなったことで、耳が聞こえない中でも家事や送り迎えをしてくれていたありがたさに気づきました。また、いつも手話で私と沢山会話をしてくれていて、私はそれに助けられていたことにも気づきました。他にも、おじいちゃんやおばあちゃんは各地の学校や市長に手話の先生として教えに行っています。普段の生活で音を聞き取ること

はできないとしても、手話が必要な人に教え、沢山の人の役に立っています。そんな二人がかっこいいし、尊敬しています。障がいのない私の何十倍もおじいちゃんはその人のために沢山のことをしていたのです。また、障がいのある家族が身近にいるからこそ現在も障がい者への差別や偏見があるように私は感じています。この前、ショート動画を見ていた時、ある動画が流れてきました。その動画では親子が画面に映る人たちの変顔を真似するという単純なことをしていました。最初は大人も子どもも楽しく真似をしていますが、あるタイミングで大人だけが真似をやめてしまいます。画面に映ったのは、障がいのある女の子だったからです。おそらく、その大人は障がい者の顔を真似することはいけないことだという意識があったからでしょう。一方の子どもは障がい者に対する知識も偏見もないのでなんの躊躇もなく障がい者の顔真似をし続けています。このように、人は、「障がい者だから真似をしてはいけない」、「障がい者だから」と無意識のうちに偏見をもってしまっていることが実際に海外の実験で証明されています。障がいのない人と、障がいのある人の間で壁を作り、変な目でみたり、態度を変えたりするとそれは差別になってしまうとこの動画を見て強く思いました。最後に私の思いを、手話で伝えます。正しい知識を知り、障がい者を自分とは違う人、かわいそうな人と勝手に思いこまないことが大切です。障がいのない人と障がいのある人の違いは生活に支障があるかないかの違いです。つまり、できることよりできないことが多いだけということを忘れないでほしいと思います。そして、私たちにもできること、できないこと、得意なこと、不得意ことがあります。障がいのある、ないに関わらず、できないことをお互いが助け合う心がけを大事にしてほしいなと思います。



優秀賞(北海道青少年育成協会会長賞)

「違うってそんなにいけないこと？」

羽幌町立羽幌中学校 3年

かみなが
神永 みそら

「多様性を大切にしよう」。そんな言葉を、よく耳にするようになりました。ニュースやポスター、広告にも、当たり前のように並んでいる多様性。

ですが、私は時々こう思うのです。「社会は本当に違いを大切にしているの？」と。私たちは、「多様性を認めましょう」と言葉にしないと、違うものを受け入れられない社会に生きているのかもしれない。本来それは、誰かに言われて行うことではなく、もっと自然に、当たり前にあるべきではないでしょうか。「あなたはみんなと違うけど受け入れてあげる」。そういった特別扱いが、見えない壁を作ってしまう。私にはそのように思えるのです。

例えば、「多様性のある社会を目指そう」と言いながら、学校では少し変わった意見を言うだけで笑われてしまうことがある。みんなと同じでいることが「正しい」とされているこの社会で、「違ってもいいんだよ」と言える人はどれだけいるのでしょうか。

小学生の頃、ひとりの子がいじめられていました。理由なんてなかったと思います。ただ、クラスの普通とは少し違う行動をしていたから。笑い方が変だとか、空気が読めないとか、そんな、みんなと違うというだけで、その子は毎日苦しんでいたと思います。

「やめなよ」。そんな言葉を口にしたら、私も「違う」とされて笑われると、そう思いました。いつの間にかその子の周りには空白ができていて、見て見ぬふりする空気が流れている。私はある瞬間に思い切って声を掛けました。その子の顔が少しだけほっとして、私の胸の奥にも、何かがほどけるような感覚が広がりました。私はほっとしたと同時にある疑問をもちました。どうして声をかけることにあれほどの勇気が必要だったのだろう。

あれから六年が経ちました。中学三年生となった今、

自分の好きなものや考えを堂々と話せる人が増えていく気がします。誰かと違う意見を言っても、笑うのではなく、きちんと聞こうとする姿勢がある。私があの時見ていた景色とは、全く違います。違うことをすぐに否定しない、あの頃欲しかった空気が、ここにあるのです。そんな小さな変化の中に私は希望を感じています。

多様性がもう特別な言葉ではなくなったとき、本当に誰もが自由に、安心して生きることのできる未来が始まる。だから、私は、これからも自分の気持ちをごまかさずに、行動していきたいと思います。「空気を読むこと」よりも「声を出すこと」が大切にされる未来のために。誰かを基準にして生きるのではなく、自分らしく生きることを大切にできる社会を作るために。今こうして自分の言葉で気持ちを伝えているのも、その一歩だと思います。

「違うってそんなにいけないこと？」。私はそうは思いません。違うからこそ生まれる気づきがある。違うからこそ誰かの痛みに寄り添える。だから私は、これからも違いに目を背けずに、まっすぐに向き合いたい。

たとえ少数派であっても声を上げていい。むしろ、少数派の声が届く社会こそが、多くの視点が尊重され、本当に豊かな社会だと思うから。

もしあなたが人と違うことで悩んでいたとしても、その違いこそがあなたらしさを作っているのです。どうか自分を否定せず、ありのままの自分を信じてください。

最後に、私の言葉を聞いてくださっている皆さんに伝えたい。

「あなたのままで、大丈夫」。



奨励賞

言葉でつなぐ、未来への想い

長沼町立長沼中学校 3年

いけした みお
池下 美緒

私たちは今、何気ない日常を当たり前のように生きています。朝起きて家族に挨拶をして、学校へ行って友達と笑い合い、家に帰ってご飯を食べる。私は、その当たり前の日常は、当たり前ではないことを5月中旬、福島県への修学旅行で学びました。

福島県は二〇一一年三月十一日の東日本大震災で、大きな揺れと原子力発電所事故によって莫大な被害を受けました。

バスで被災地を巡っていたとき、バスガイドさんが震災当時の話や、今も続いている復興の様子について語ってくださいました。その話はこれまでに聞いたことのないものばかりで、私は気づけば真剣に耳を傾けていました。それまで「震災は昔の出来事」と思っていた私にとって、その話はとても衝撃的でした。

「この辺りには、かつて普通の町があり、多くの人が暮らしていました。でも、津波や原発事故で、今も戻れない人がたくさんいます」

ガイドさんのその言葉とともに、バスの窓から見たのは、誰も住めなくなり、時間が止まってしまったような景色でした。あの日から干されたままの洗濯物や、人が管理しなくなったために崩れてしまった沢山の家に私は胸が痛くなりました。

特に私の心に残っているのは、放射能の影響で今も家に帰れない人がいるという話です。

自分の家に帰ることができずに、仮設住宅や別の地域で暮らしている方々がまだたくさんいると知り、私はとても悲しくなりました。「早く家に帰りたい」という思いがあっても10年以上経った今でもそれが叶わないこと。この長い時間で、他の町に生活基盤ができてしまい、もう戻ってこない人も大勢いること。

その重さに、私は「震災はまだ終わっていないんだ」と実感しました。

このような放射能の影響を受けた地域では、今も除染作業が続けられていると聞きました。土を入れ替えたり、建物の表面を洗い流したりして、少しでも安全な環境に戻そうと、多くの人が努力を続けているそうです。バスガイドさんは、「除染作業が遅いとは思わないでほしい。町に害がないように丁寧に少しずつ進ん

でいます」と教えてくださいました。その言葉にも、震災を「終わったこと」にしないための責任を感じました。

修学旅行の最終日に聞いた語り部の方のお話も、深く心に残っています。「家も家族も失ったけれど、生き残った私たちが伝え続けないと、あの出来事は風化してしまうから」と語るあの姿には強い覚悟がありました。そして、「中学1年生だった息子もあの日亡くなりました。」という一言に、私は言葉を失いました。話を聞いていたクラスの雰囲気ガラッと変える一言でした。私は、その息子さんの年齢をもう超えています。もし震災がなければ、その子も今の私のように、友達と笑ったり、悩んだりしながら生きていたのかもしれない。そう思ったとき、「生きていることって奇跡なんだ、いま過ごしている日常は当たり前ではないんだ」と気づかされました。

そして私は、生き残ることができた大事な命を無駄にしないために、これから「言葉」をどう使っていくかを考えるようになりました。誰かを傷つけるためではなく、大切なことを伝えるために言葉を使いたい。語り部さんのように、震災の記憶を誰かに伝えていくこと、そして、日々の小さな幸せがどれほど尊いかを伝えていくことが、今の私にできることなのだと思います。

私は二〇一〇年、まさに東日本大震災が起きる約一年前に生まれました。だからこそ、震災の記憶は残ってなくても、「震災とともに生まれてきた世代」として、今をどう生きていくか考える必要があると感じました。福島に行き、いまの現状を見て聞いて、感じたという経験を忘れないこと。震災を「遠い場所の、昔の話」ではなく、「自分ごと」として受け止めること。そして、それを誰かに伝えていくこと。それが、今の私にできる最大限のことだと思いました。

当たり前の毎日は、実は奇跡のようなものです。今、自分がこうして笑って過ごせていることに、感謝しながら生きていきたいと思いました。そして、福島で出会った人たちの強さや優しさを、ずっと忘れずに、未来へつないでいきたいです。



奨励賞

世界で一番きれいな言語

恵庭市立恵み野中学校 3年

こばやし

小林 ななみ

皆さんは、「世界で一番きれいな言語」は何だと思いますか。

今では授業で英語を学んだり、K-POPが好きという理由から韓国語を覚えたりと、普段の生活で様々な言語の中で私なら「それは手話だ。」と答えたい。

手話は言うまでもなく、ろう者、耳が聞こえない人が使う独自の言語だ。私はあるドラマで手話の存在を知った。ろう者と聴者が会話を交わすことの難しさを表現した場面が印象に残った。そのドラマがきっかけで手話で話せるようになりたいと思うようになった。それは多分、ドラマで見た手話を「きれい」と思ったからだと思う。それとちょっとの好奇心。私はテレビやインターネットで手話の情報を求め、挨拶やよく使われる単語を少しずつ覚えた。調べていくうちに「手話言語条例」という言葉を知った。手話を言語として認め、必要とする人々が使用しやすい環境を整えるべきであると定め、二〇一三年に制定された条例だ。私は初めてこの条例を知ったとき、心の中がモヤッとした。十二年前にこの条例ができるまで手話として認められていなかったという事実になんか納得ができなかった。つまり十二年前までろう者と聴者、耳が聞こえるか聞こえないかの違いで社会的に分けられていたということだ。だが手話言語条例を認めている自治体は今では587にのぼる。手話を言語とする人々がようやく社会の中であたり前の存在として受け入れられようとしている証だと思う。

身近にろう者が居るわけではなく、ただドラマを見て好奇心をもった私だが、自分なりに手話を学ぼううちに、実際に手話で会話をしてみたい。自分の手話が伝わるのか確かめたいと思うようになった。

ある日、私は家族と一緒にエスコンフィールドの開業記念イベントに行った。そこになんと手話体験のブースがあったのだ。私はこの時、初めてろう者の方と

出会った。最初はボードを使って筆談で会話をを行った。自己紹介をする時、私は勇気を出して手話を勉強して少しわかと伝えた。すると驚いた表情をしてから、笑顔を見せてくれた。思い切って自分の名前を手話で伝えた。ほんの少しだったけれど手話で会話できたことがなにより嬉しかった。自分の言葉で喜んでくれる人がいるというのは私にとって大きなことだった。人と人としての心からの関わりがもてたような気がした。それからは地元のイベントで手話体験が出来る機会があると積極的に参加した。高校生になったら手話講座を受けたいと思っている。

今、世界で手話を使用している人の割合は0.03%といわれている。限られた人々の言語だけれど手話はまぎれもなく、積み重ねられてきた一つの文化だ。声を使わず会話をするためには手や表情が肝心だ。必然的に目と目をしっかり合わせ、相手が表現しようとする全てを感じとろうとする。逆に周りがどんなに騒がしくても邪魔されることはない。まっすぐに思いを伝えることができる。理解しよう伝えようという意志があって成り立つ言葉。私はこれこそがコミュニケーションの根本であり、人と人との関わる上で最も大切なことだと思う。だから私は手話が「世界で一番きれいな言語」だと思う。

この魅力的な文化との出会いで自分の世界が広がった。私はこれからも自分なりの手話の勉強を続けていきたい。そして違う文化を持つたくさんの人達と出会い関わっていきたい。

人と人との関わりはほんの小さな好奇心から始まる。私達一人一人が文化の違いを理解しようとする姿勢を持つことで、世界は変わっていくと私は信じる。



奨励賞

人生を変える本

倶知安町立倶知安中学校 2年

やまざき ひな か
山崎 日菜香

皆さんは本が人生を変える、そんな事があると思いますか？

本が人生を変えるなんて、そんな事あるわけない。そう思う方もいるかも知れません。しかし実際に、本で人生が変わった人もいます。これから話すのは、今も昔から変わらず、本が大好きな私が経験した、とある本とのお話です。

私は、幼稚園のときに本と出会ってから、沢山の本を読むようになりました。そのため、本と友達になった私は、必要最低限しか外に出なかったり、友達なんかいないと思ったら、何事に対しても消極的に日々を過ごしていました。

しかし、小学二年生のときに、私の人生を変える本と出会います。それは、世界的にも有名な「ハリー・ポッター」シリーズです。

周りの人からおすすめされるがまま読んだ「ハリー・ポッター」に、私はシリーズの一作目から心を掴まれました。そして、何度も何度も読んでいく中で、どんどん自分が変わっていくのを感じました。

主人公たちが外に出て冒険をしていたら、私も外に出て冒険したくなり、主人公とその友達が一緒に何かに挑んでいたら、私も一緒に何かに挑める、そんな友達がほしいと思いました。

間違いなく、「ハリー・ポッター」シリーズのおかげで私は変わることができました。また、前向きに、様々なことに挑戦しながら生活できるようになりました。

その後、私は少しずつですが、積極的に外に出るようになりました。小学校では、自分から周りの子に話しかけるようになり、中学生になった今でも毎日のように話す、そんな友達と出会うことができました。

私にとって本とは、「人生の『道標』」です。私の人生は、ずっと一本道だと思っていました。しかし、「ハリー・ポッター」に出会ったことで、もう一本の道が現れ、それからどんどん新しい道が現れました。それはまるで、「ハリー・ポッター」が、私の「人生の『道標』」となり、新しい道を示してくれたかのようでした。

だから私は、皆さんに本を読んでほしいです。

しかし、時間がない・難しい・ピッタリの本に出会えないといった悩みで、本を読むことが苦手な方もいると思います。それでもちょっとした工夫で、本への悩みはなくすることができます。

時間がないのであれば詩集や短編集を選び、常に持ち歩くようにしてみてください。難しかったり、本を読むのが苦手、という方は漫画や推しが書いた本、ゲームの攻略本などを読んでみてください。

そして、ピッタリの本に出会えない、という点。確かに、今の自分にピッタリの本がすぐ見つかるのはとても難しいと思います。しかし私は、読んで損だった本など、この世にないと思っています。漫画でも推しが書いた本でもゲームの攻略本でも、どんな本でも得られる知識や情報はあるし、その知識や情報はいつか必ず、貴方の役に立ちます。だから手当たり次第でいいので、沢山の本に触れてみてください。すぐは出会えなくても、いつかは必ず、貴方にピッタリの本と出会うはずですよ。

私は皆さんに、今までよりもっと本を読んでほしいです。沢山本を読んで来た人も、読んでこなかった人も、もっともっと本を読んでほしい。そしてなにより、人生を変えるような本と出会ってほしい。そう思っています。

私にとって、本は「人生の『道標』」となりました。貴方にとって、本はどんな存在になり、貴方の人生にどんな変化が起きるでしょうか。もしかしたら貴方の背中を押してくれる存在になるかもしれないし、今まで気づかなかったことに気付かせてくれる存在になるかも知れません。それが分かるのは、沢山本を読んだ後の貴方のみです。

だから私は、もっと多くの人に、沢山の本に触れてほしいです。さあ、この発表を聞いた貴方は、まず、どの本を手に取りますか？



奨励賞

未来をつくる、その一步

白老町立白老中学校 2年

えぐさ ゆうか
江草 優果

「選挙に行くのが面倒だったから。」これは、総務省の調査による、投票に行かなかった人の理由、上位三項目のうちの一つである。国民こそが、政治勢力の責任主体である日本。しかし、政治に興味をもたない意見を私はよく目にする。実際、直近行われた国政選挙では、選挙権をもつ国民の二人に一人しか投票をしていないことがわかった。この結果に対し、海外に目を向けてみると、投票率が九割を超える国もあるようだ。この現状に私は一つの疑問が湧いた。「この国の未来を作っていく私達が、政治に興味をもたないのはなぜなのか」と。

まず、日本人は仕事に多くの時間を使っているという意見に私は着目した。日本商工会議所の調査によると、日本では今、約六割の事業所が人手不足を訴えており、一人あたりの負担や業務量が増加する問題が挙げられている。にもかかわらず、勤務時間の減少を促す改革が進んだことにより、仕事を持ち帰る人が増えているのが現状だ。

次に、日本における投票率には、年代が影響していると私は考えた。政治に興味をもたない意見をよく目にするSNSの利用者は、若年層が多いためだ。総務省の調査によると、令和六年の投票率は、日本の中でも人口が多い高齢者層が六割を超えているのに対し、二十代は四割を下回っていた。

この結果から、私は現在の日本社会に訴えたいことが三つできた。

一つ目は、労働環境の改善である。国民が、より有意義に時間を使える環境を目指して、現在の労働環境に対し、育児等の特別な理由で休暇を取りやすくしたり、仕事の割り振りを効率化させたりする取組を行うことを提案する。限られた時間を少しでも自由に使うことで負担の軽減に繋がり、世間に目を向ける余裕も生まれるはずだ。

二つ目は、政治をより身近に感じるための工夫であ

る。日常生活で得られる政治に関する情報が、手軽さやわかりやすさに欠けていることにより、まず理解に追いつけないという意見を私は目にした。この問題を解消するためには、普段から政治に触れる時間を生み出すことが重要である。政治に関わる時間を学校や職場等で数分とるだけでも、国民が政治に関心をもつきっかけになると私は思う。

三つ目は、若年層が安心して生活できる政策の増加である。最も身近な、国民が政治に関わる機会である、選挙。人口の割合が多い高齢者層の投票率に比べ、人口が減少傾向にある若年層の投票率が著しく低いことが現状としてあり、政治に対する興味が薄い。この原因として、私は現在の日本の政策が関係していると考えている。日本では、税金の使い道を選挙で選ばれた議員が自身の政策を基に決めている。つまり、税金の使い道は政策に多大な影響を受けているのだ。そこで、税金の中でも使われる割合が大きい社会保障関係費の内訳に着目すると、大半が年金給付費や介護給付費等の高齢者層の生活に関わるものに使われることがわかった。高齢者層に寄り添った政策は多くの票を集めることができるため多いものの、幅広い世代それぞれのニーズにあった政策の増加や、世代ごとに投票数の多い政策の可視化を行うことこそが、多くの世代の意見を取り入れ、よりよい未来を作る基礎となるはずだ。

政治への興味、関心の薄さが投票率の低さや身近なつぶやきに現れている現代の日本。そんな中で、政治に関わるために、一つでも行動を起こそうとする、その意識こそが、この国をより良い国にする一歩になるのだ。あなたも、自分のできることから始めて、共に創り上げよう。誰もが安心して生活できる国を。



奨励賞

『私を生きる』

様似町立様似中学校 3年

まくた あんじゅ
幕田 安寿

私は必死でした。周囲の思い描く私を生きて、期待に応えることに。私は学級長や体育祭のキャプテンを務め、勉強にも自分なりに一生懸命取り組んできたつもりです。期待してもらえることが嬉しくて、多少苦手なことでも前向きに挑戦し続けました。その結果、周囲からは『努力家』や『頼れる人』と言ってもらえるようになりました。そうした印象が強くなるにつれ、どれだけ頑張っても私の努力した結果は私にとって『当然できること』だと捉えられ、次第に評価の基準も高くなっていくのを感じました。周囲にとっての『当然』ができれば失望されるのではないかという不安によって、もともと私が持っていた頑張りたいという気持ち以上に人の目を気にするようになり、無理をすることが増えていきました。そんな私の転機は、ある女の子との出会いです。私は陸上競技に励んでいて彼女とは陸上を通して知り合いました。私はこれまで『嫌われたくない』という気持ちから、ありのままの自分を出せないことが多くあり後ろめたさを感じていました。しかし彼女と会った時、最初こそ緊張していましたが、話しているうちに不思議なほど気が合い、素の自分でいられました。彼女とは陸上の練習を通して仲良くなり、ある日一緒に買い物に行く約束をします。いつも練習をしている姿しか見たことがなかったため「彼女をもっと知ることができる！」とワクワクが止まりませんでした。しかし普段の陸上の練習とは違い、買い物は選択の連続だと気付いた時、私は彼女との間で初めて不安を抱きました。－彼女が今まで知らなかった私の一面を知ったらどう思うだろう－と。彼女との関係が壊れるのではないかと不安になり、楽しいはずの会話にも戸惑いが生まれ、『どこに行きたい』『何をしたい』といった簡単なことさえ言えなくなっていました。しかしふと、本当の自分を出せなかった友達との関係を思い出し、『このままでは変わらない』と思ったのです。『嫌われるかもしれない』という不安よりも彼女の前でも偽った自分であることへのもどかしさの方が強く感じられました。私は心配を

押しのけ、思い切って伝えました。「私、こういうの好きなんだけど、どう思う？」返答を受け取るまでの時間はとても緊張しました。そんな中、彼女の声は弾むように私に飛び込んできました。「本当!?私も好き!」彼女の眩しい笑顔を見た途端、肩の力が抜け、勇気を出してよかった!と心から思いました。私はこれまで、本当の姿を出せば孤独になってしまうと思っていましたが、それは間違いでした。むしろ、同じ想いを持つ人と出会うための第一歩だったのです。

この経験を通して『本当の自分を生きるために大切にしたい二つの考え』に気づきました。

『周りの理想にならなくてもいい』これが一つ目の考えです。誰かの「がっかりした」という言葉は「私の望んだようにならなかった」という個人的な落胆にすぎず、その嘆きを背負う必要はありません。とはいえ、他人を一切気にしないのは無理難題だと、私は知っています。そこで二つ目の考えが重要になります。

『周りの声にかき消されないように、自分の本当にしたいことを見つける』これが二つ目の考えです。その場その場で自分を取り繕うことではなく、「本当はどうしたいの?その選択は後悔しない?」と問いかけ、自分の声を聞くことがありのままの自分を大切にす第一歩になると思います。自分の声を一番に聞くことで、他者の意見や期待を『選択肢の一つ』として受け入れられるようになり、より柔軟な考え方ができるようになります。重要なのは、たくさんの意見に触れた上で、自分が本当にしたいことを選ぶことです。

私は勇気を出したことで得たこの二つの考えを胸に、自分自身を成長させていきます。例えばこの経験から私は、友達といる時も偽らずに本音を伝えることで、深い関係になれると気づきました。なので、日常の会話で気持ちをしっかり伝え、自分の力で信頼できる友情を築いていきたいと思っています。その先にもっと自分らしくいられる今よりも強い私が待っているから。



奨 励 賞

「大事にしたい、真っすぐな想い」

北斗市立茂辺地中学校 1 年

あおき
青木

あおい
葵

「友達になろう。」

ある日、私はオンラインゲームをしているときに、一緒にチャットで会話をしていた人に言われたことがありました。その子とは、共通の趣味をもっており、チャットでのやりとりはとても楽しい時間でした。しかし、改めて「友達になろう。」と言われた時、私は、「友達」って何だろう？友達になったら、何か変わるのかな？ふいに私の心の中に、顔を見たことのない子と約束する「友達」という言葉に戸惑いを感じ、返事をするのができませんでした。その後、その子とはチャットをする機会はなく、何となく、その時の出来事が私の心の中で、今でも、もやもやと残っています。

皆さんも、誰かと会話をしている時「この言葉ってどういう意味なのだろう。」と考えたり、勘違いをして受け取っていたりした経験はありませんか。また、相手に伝えたいことがあるのに、適切な言葉がでてこない。そんな経験が私にはたくさんあります。だから、私は今、できるだけたくさんの言葉を覚えて、使えるようになりたいと思っています。

言葉はすごい。誰かの心を楽しくさせたり、幸せにすることができます。しかし、言葉は、相手を傷つけ、喧嘩に発展することもあります。世界に目を向けてみても、未だに、ウクライナとロシア、イスラエルとガザ地区、その他にも戦争や内戦が終結する様子がありません。平和を望む人たちは皆「しっかり話し合えばいいのに。」と思っているはずです。こんなにもたくさんの言葉があるのに、どうして、その言葉を使わずに武器を使って、多くの人の命を奪ってしまうのだろう。諦めずに、何度も何度も、たくさんの言葉を使って伝え続ければいいのにと、私は思います。それ以外の解決方法はあるのでしょうか。私はないと思います。

私は今、英語や韓国語の言語にも興味があり、勉強

するようになりました。日本語には、相手を思いやる優しさを感じる言葉が多いと感じます。その分、伝えたいことを理解するための想像力が必要だと考えます。その反面、英語や韓国語は、相手に自分の意志が強く伝わりやすい言葉だなと感じます。同じ意味の言葉なのに、話す言語によって、伝わり方が違うことが、とてもおもしろいと感じています。

だから私は世界中の「言葉」をたくさん覚えたいと思っています。自分の意見をしっかりと相手に伝えたい。そして、できる限り、相手に不快な思いをさせないような言葉を使って、多くの人と話しをしていきたいです。

今は便利な世の中です。今、こうして私が書いている作文もAIに頼めば、素晴らしい文章に直してくれるのかもしれませんが、でも、私は、相手を見て、どんな言葉を伝えるべきか、どういう風に伝わってほしいかを考えて言葉を発する人になりたいと思っています。

また、いつかチャットで「友達になろう。」と言ってくれた子と話をする機会があったら「これから、楽しい話をたくさんしよう。」と私から言えるようになりたいと思います。

私の将来の夢は、弁護士になることです。「言葉」には人を救う力があります。これから、たくさん勉強をして、私自身も、世界中の人も幸せに生きていく方法を考えていきたいと思っています。



奨励賞

「行動」して花を咲かせて

江差町立江差中学校 2年

いいだ
飯田 ころ

「自分がやったって何も変わらない」「いつか行動するから、今じゃなくても良い」このような理由を付けて、行動できるはずなのに、行動しなかった経験はないだろうか。私はある。私は行動することが苦手だから、行動しなくて良い。果たして、本当にそうだろうか。今の私はそう思わない。行動するのが苦手でも、行動しなくて良い理由にはならない。そう思ったから、行動することができたんだと思う。私は、本当に行動できるようになって良かったと思っているからこそ、皆さんに伝えたい。行動することの大切さを。

去年の春のこと。登校中、地域の方から「おはようございます」と言われたのがきっかけだった。私は挨拶してくださった事がとても嬉しく、「自分から挨拶を試みよう!」と思った。次の機会には、相手を見て「おはようございます!」とすることができた。地域の方も「おはようございます」と言ってくくださった。この出来事は私に「挨拶っていいな」と思わせてくれた。そして、良い挨拶をかわす事によって、自分も相手も笑顔になり、元気づけられる。つまり、良い関係を築けている、という事だと思った。自ら行動した事で、「挨拶の良さ」が確信に変わった。行動して、本当に良かったと思った。

また、他にもこのような経験がある。私の祖父は足が悪い。歩けるけれど、私よりもずっと遅い。いつも歩くと苦しそうにしている。でも、私に心配をかけないように「大丈夫大丈夫」と言う。私はそんな祖父を見るのが苦しかった。だからこそ何かしたい、そう思った。ある日の事。私の家族と祖父祖母で旅行に行った。旅行のプランは、なかなかハードで私でもキツいぐらい。もちろん歩く事だってある。祖父は皆と歩くとどんどん距離があく。私は祖父にも楽しんで欲しかったし、祖父と一緒に楽しみたかったから、皆と離れても、祖父と一緒に喋りして笑って歩く。すると祖父から「おじいちゃんの事は気にしないでいいから、

先に行っていていいよ」と言われた。私は悲しかった。私がしたくてした事だったけれど、祖父にはそれこそが負担で、迷惑だったのだろうか。私には分からなかった。胸にぽっかり穴が空いたような気分だった。でも、あまり気にしないようにした。私は「そ〜お?」と言いつつも、祖父の元を離れた。旅行が終わって、数日後。私は祖父の家を尋ねた。祖父の家に来てから数時間経ったとき、祖父は私にお小遣いを渡そうとした。私は「いやいや大丈夫だよ」と言うと、「いつものお礼だよ」と言った。正直何のお礼か分からなかったので聞いてみると、「一緒に歩いてくれたり、遊びに来てくれたり」と言ってくれた。前の旅行の時も迷惑じゃなかったのかな。と思えた。本当に嬉しくて一つの悩みがスーッと消えた。私はあの時、祖父に寄り添うという行動をして良かったと、心から思った。次は「迷惑かな」と気にせず、もっと近くで一緒に楽しみ続けたいとも思った。やってみた事で、相手の気持ちを理解するきっかけとすることができた。何もしなければ、何も分からないままだったと思うと、行動する事はとても大切だったと、改めて感じられる経験となった。

以上の二つの話から、「行動」とは人生において必要不可欠な大切な行いであると学んだ。まずはやってみなくちゃ分からない。行動すれば何かは必ず変わるから。もちろん失敗する事もある。その時は失敗を生かして前に進む事が自分の成長に繋がると思う。「行動の積み重ね」というのは、花と少し似ている。小さな行動が種となり、だんだん芽が出て、葉ができて、花が咲く。皆さんも、行動して、自分という花を咲かせてみて欲しい。いつか、ではなく、今、皆さんができる行動を、後悔する前に。



奨 励 賞

ファーストペンギン

東川町立東川中学校 3年

にしくま じゅり
西隈 樹里

皆さんはファーストペンギンという言葉を知っているでしょうか。ファーストペンギンとは「ペンギンの群れの中から、危険が待ち受けている海へ最初に飛び込む勇気のあるペンギン」のことです。私はそんなファーストペンギンであり続けたいと思っています。そう考えるようになったきっかけは私の生い立ちにあります。

私は母の出身である大阪で生まれました。それからオーストラリアやフィリピン、マレーシア、シンガポール、香港などを点々としていましたが、三歳の時に沖縄に移住することになりました。そして沖縄で六年間ほど生活した後は現在の北通道に行きつきます。

このような話をすると「すごいね。なぜ南なら北に？」と言われます。なぜなら現在住んでいる東川町に魅力を感じたのが最大の理由です。本当にたくさんの魅力があるのですが、二つの観点から良さを述べたいと思います。両親が考えた東川の最大の良さは子育て支援がとても充実していたことだそうです。また、長く都市部で生活してきた両親にとって自然が豊かなところにもすごくひかれたそうで、私達きょうだいにのびのび生活してほしいと思ったのだそうです。母は「ここで子育てをしたい」と強く望み、父もそれに賛同して、私達家族は東川で暮らすことになりました。

今では何も困ることのない北海道生活ですが、移住したてのころはわからないこと、びっくりしたことがたくさんありました。

一番驚いたのはやはり気候の違いです。年中湿っていて蒸し暑いじめじめとした空気の沖縄とは正反対で、からっとして冬にはたくさんの雪が降る北海道にとってもびっくりしました。幼い頃に雪を見たことはあったのですが記憶になかったので、初めての雪でした。一年目は雪遊びを思うぞんぶん堪能しました。

車で五分のところにあった海はもうありませんが、その分雪を通して楽しむことができました。また、話す言葉が違って少しとまどうこともありました。北海道ではごみを捨てることを「ごみなげ」といっているので初めて聞いたときは「え？なげるの？」と疑問に思ったのを今でも覚えています。

さて、今私は東川町の教育がとても素晴らしいと思っています。東川町では留学生が多く暮らしています。彼らとの国際交流を通して学べる英語の授業「Globe」という教科があったり、海外のくらしや食、文化などを学べるインターナショナルクラブという活動もあります。私もそのクラブに参加しており毎回たくさんの人と交流して貴重な経験をさせてもらっています。中でも特にすごい取り組みがフィンランドとの短期交換留学が行われていることです。二年に一回東川町の生徒から選ばれた五人がフィンランドに十日間程度短期留学できるのです。私も嬉しいことにその代表に選ばれたので東川中学校の代表として多くのことを学んで将来に活かしていける経験を積みたいと思っています。

私はこのようなグローバルな交流の経験を通して世界中の様々な人と関わる仕事がしたいと思うようになりました。今では私の将来の夢はさまざま土地を訪れる「客室乗務員」になることです。そのためにいろいろな人と積極的に関わって生活していこうと思っています。いろいろな地域の人と交流したり仕事をする中でたくさんの困難や苦労があると思いますが、困難や苦労に立ち向かえるよう、今、中学生の私にできるたくさんの経験を積み、精神的にも成長したいと思っています。

冷たい危険が潜む海に真っ先に飛び込むファーストペンギンで私はあり続けたいのです。



奨励賞

故郷が教えてくれた「本当の豊かさ」

枝幸町立枝幸中学校 3年

いけだ
池田

あずさ
梓

「枝幸町って、本当に何もなかったところだね。不便じゃないの？」都会から来た友人に、そんな言葉をかけられることがよくあります。初めて言われたときは、正直少し寂しい気持ちになりました。確かに、枝幸には、都会の暮らしに慣れた人たちが「当たり前」と考えるものがほとんどありません。電車や大きなショッピングモール也没有。都会の人が当たり前のように求めているものが、枝幸には見当たらないのです。

考えてみれば、都会には枝幸にはないたくさんのモノがあり、情報があふれています。しかし、その「便利さ」や「豊かさ」の陰には、何か大切なものが失われている気がしてなりません。例えば、多くの人がビル群の中でスマホを眺め、人との直接的なつながりが薄くなっている様子を目にすると、「心を豊かにしてくれる本当の『宝物』は、そこにはないのではないか」と感じてしまうのです。物質的な豊かさや情報に囲まれた生活が、必ずしも心の豊かさにつながるわけではないと、私は思っています。

枝幸の宝物。それは、まず何よりも「人の温かさ」です。私の通う学校は、クラス全員が小さな頃からの幼なじみ。小学校に入学する前から知っている子ばかり、みんな家族のように仲良しです。困っている子がいたら、すぐに誰かが声をかけ、助け合います。都会では、隣に住んでいる人の顔も知らないことが普通だと聞きますが、枝幸では、町を歩けば誰かしら知り合いに会って挨拶をします。近所のおじさんやおばさんは、私たちの成長をずっと見守ってくれています。そうした地域全体で支え合うような関係性は、枝幸が誇るべき宝物の一つです。そして、枝幸は「豊かな自然」の宝庫です。町は緑いっぱい、空気が本当に美味しいです。夏には、真っ青なオホーツク海をながめながらサイクリングをして、潮風を浴びてリフレッシュできます。そして、冬になると、流氷がゆっくりと枝幸の海岸に近づいてきます。特に、少し高い山の上から

眺める流氷は、息をのむほど美しい光景で、その雄大さに感動せずにはられません。たまに、山から熊や鹿が町に出てくるなんてこともありますが、そんなこと気にならないくらい、枝幸の自然は私たちに多くの恵みと感動を与えてくれます。

先日、私は「世界一貧しい大統領」として知られるウルグアイのホセ・ムヒカさんの言葉に出会いました。「私たちは発展するために生まれてきたのではない。幸せになるために地球に生まれてきたのだ」この言葉が、枝幸にいる私の胸に深く刺さりました。私たちは、常に発展し、便利になり、より多くのものを手に入れることが「幸せ」だと教えられてきたような気がします。でも、本当にそうなのでしょうか。ムヒカさんの言葉は、発展や便利さだけが幸せの基準ではないと教えてくれました。そして、都会とは違う枝幸の宝物がかえって私に、本当の豊かさや幸せについて深く考える機会を与えてくれたのです。だからこそ、私は、自分の故郷である枝幸を、衰退させてはいけなと思っています。都会のように無理に発展させるのではなく、枝幸にしかない宝物を大切に守り、その魅力をこれからもどんどん発信していくことが、私たちの未来につながると信じています。そして、もっと多くの人に枝幸の本当の魅力、隠された宝物を味わってほしいと願っています。そして、誰もが自分の故郷に、枝幸のような誇りを持ってほしいです。

もし、また誰かに「何もなくてね」と言われたら、私は自信を持ってこう伝えます。

「ここ枝幸には、都会とは違う、かけがえのない『宝物』がたくさんあるんだよ」

この枝幸で得た経験と気づきを胸に、私はこれからも、この町が持つ豊かな心と自然の魅力を、多くの人に伝えていきたいと強く思っています。それが、私の故郷、枝幸に対する一番の恩返しだと信じているからです。



奨励賞

東日本大震災を胸に刻んで

帯広市立帯広第五中学校 2年

まつもと みうな
松本 美海

「美海が生まれたのは東日本大震災の年なんだよ」と母が言ったのは、私が小学六年生のときでした。二〇一一年三月十一日、私はまだ、母のおなかの中にいました。母は地震直後すぐに宮城に住む祖母へ電話をかけましたが、一週間もの間、連絡がとれなかったそうです。その間、祖母はどうしていたのでしょうか。一昨年、夏休み、復興が進む石巻市を訪ね、当時石巻市内の小学校長だった祖母に話を聞きました。

「家と家の間から大きな水の塊が押し寄せ、後者に津波が迫ってきている。自動名簿だけを握りしめて、校舎三階へ避難させた。全員が助かったわけではなかった」

と祖母は低い声で話しました。そして、学校へ迎えに来た保護者と児童の後ろには、ものすごいスピードの津波が接近してきていて、

「逃げて！もっと速く走って！」

と声がかかるまで叫び続けたけれど、彼らは私の目の前であっという間に黒い壁のような津波に飲み込まれてしまった。その時の祖母の顔は今でも忘れられません。一瞬で車や家、人までも飲み込み、命を奪うなんて、現実になんかそんなことが起きるなんて… 恐ろしすぎる、悲惨すぎる、と言葉には表せない感情でいっぱいになりました。

祖母の学校は物資の備蓄がなく、震災から三日目までは、一日一杯の水とかっぱえびせん二本、ポテトチップス三枚しか食べるものがありませんでした。雪が降る深夜の学校は相当冷え込んでいたので、暗幕やカーテンで身を包み、体を寄せ合って寒さを乗り切ったそうです。

私なら、家族と離れ離れになるだけでも心が折れそうなのに、わずかな量の食事しか取れないなんて信じられない。帯広の冬は暖房なしではしのぎきれないし、

そのまま死んでしまうかもしれない。と、私はだんだん怖くなってきました。しかし、そんな私の顔を見て「こうやって災害について話を聞いてもらえるのは、とても嬉しいことなんだよ」

と言う祖母は、いつもの優しい表情に戻っていました。

一昨年、秋、知床へ旅行に行った時のことです。緑色の津波避難マークが至る所にあり、気づくと目で追っている自分がいました。釧路へ向かう車中、この海岸線から高台までは遠い…もし今津波が来たらどうしよう、と考えていました。祖母の話を聞いてから、目に映る景色が今までとは全く違って見えたのです。

「もしも」のことを考えておくことは生きていく中で全ての基盤になると思います。災害を他人事のように捉えていた私に、祖母は、先を見すえて生きることの大切さを教えてくれました。

私の名前に「海」という文字が入っている理由の一つは、震災の年に生まれたからだそうです。どうしてもわざわざその文字を名前に入れたかが今ならわかる気がします。震災があったことを決して忘れず、自分で生き抜く力を備え持ってほしい。そんな意味が込められているのではないのでしょうか。

震災の記憶が風化し、被災者がいなくなったその先も私はその恐ろしさや残酷さ、そして命の大切さや、もしものことに備える重要性を語り継いでいこうと思います。きっと祖母はそれを伝えたかったのだと思います。

私は、友達や先生、家族…大切な人を誰一人失いたくない。だから、伝えていきます。東日本大震災を胸に刻んで。



奨 励 賞

なりたい自分になるために

白糠町立茶路中学校 3年

ついき あこ
對木 亜香

私は初対面の人と話すことが苦手です。なぜなら、相手との会話が進まなかったり、受け入れてもらえなかったりするのが怖いからです。要するに、人との関わりで失敗するのが嫌なのです。

バドミントン部に所属している私は二年生の時、海外の選手と合同練習を行う機会がありました。後半には翻訳機を使って話し、仲良くなることができましたが、最初は緊張して話かけるまでに時間がかかり、楽しく過ごせた時間が短かったことをとても後悔しました。この時の私は、話が续かず空気が重くなり、無駄な時間になってしまうことを恐れ一歩を踏み出せずにいました。しかしこの時「もっと話したかった」という後悔とともに、このままでは新たな人間関係を構築できないという危機感を覚え、怖がらず自信を持って話せる自分になりたいと思うようになりました。

そんな中私は自分から話しかけ、行動を起こすことで自分の視点や、人間関係を大きく広げ、更に成長するチャンスが増えるということを実感した出来事がありました。それは、白糠町が行っている海外研修で、インドネシアへ行ったことです。初めての海外にとっても緊張しましたが、画面の向こうの問題だと思っていた環境問題や治安の問題を目の当たりにしたことで、濃い研修となり、国内外の環境や文化について自分の知見や考えを広げることができました。人と関わるのが苦手だった私が充実した研修を送ることができたのは、日を追うごとに自分から人と関わろうとすることができたからです。

一日目はとても緊張し、硬い表情で活動をしていました。しかし、二日目は通訳の方を通じて自分の意思を伝え、意欲的に活動に取り組みました。さらに三日目以降は、進んで現地の方と直接話し、コミュニケーションを取ることにたくさん挑戦しました。初めは自

分から話すことに抵抗がありましたが、一度会話に成功すると心がとても軽くなり、緊張がほぐれました。そのおかげで、周りの人に頼らずに、主体的に活動に取り組みました。また、スーパーでの買い物を体験したとき、単語や正しくない文法で話す私の言葉を一生懸命に聞き取り、一緒に商品を探してくれ、見つかったときには笑顔で喜んでくれた店員さんに、初対面の人と関わる勇気をもらいました。

これらの体験を通して、自分から「積極的に人と関わりたい」という気持ちが芽生え、人と関わることに対しての考えは「怖いもの」から「可能性を広げてくれるもの」に変わりました。そして、行動を起こすことは楽しく、相手はこちらに寄り添い、応援してくれるということに気が付きました。

私がした体験は誰にでもできるものではないと思いますが、出会いや、新しいことへ挑戦する機会は必ずあると思います。私は帰国後、初対面の人にも、自分から話しかけることができるようになりました。お互い笑顔で会話ができる時間はとても楽しく、私を前向きな気持ちにさせてくれます。

たくさんの人と関わり、温かさに触れることで、私はなりたい自分になることができました。私は、これからも人と関わり続け、思いを受け取りながら成長していきたいと思っています。



奨励賞

手を差し伸べて

札幌市立山鼻中学校 2年

あら い ゆ り か
新井 優理香

「穂乃香、どうしたの？」

私の妹の習い事の送迎のため、母の代わりに姉と留守番をしているときのことです。私は呼吸がしづらくてつらそうな顔をしている姉を見て話しかけました。しかし、姉は瞬きをするだけで、何も教えてくれませんでした。

私の姉は「脳性麻痺」という障害を持っています。脳性麻痺とは、お母さんのお腹にいる間から、生後四週間までの間に発生した脳への損傷によって引き起こされる運動機能の障害のことです。私の姉の場合、体が自由に動かせなかったり、会話ができなかったり、飲み込む力や噛む力がなかったりします。

小学校に入る前くらいまでは、ずっと一緒だったこともあり、姉が障害を持っていることを特に不思議には思っていませんでした。むしろ、それを当たり前のように受け止めていた気がします。しかし、自分の成長とともに、障害についてだんだん知っていくにつれて、「どうして私の姉が障害をもってしまったのだろう。」と、とにかく不思議でたまらなくなりました。宿泊を伴う家族全員での旅行やキャンプなんて人生で一度もないし、せめて日帰りでアウトレットモールに行くときも、通り過ぎる人の視線がとにかく冷たく感じて、苦しかったです。

しかし、最近になって気付いたことがあります。それは、姉自身や私達家族が困ったときには、警備員さんやスタッフさん、ときには街の人が手を差し伸べてくれていたことです。例えば、家族全員でレストランにご飯を食べに行ったときのことです。父が恐る恐る「娘が車椅子に乗っているんですけど、大丈夫ですか？」と聞いたら、スタッフさんが笑顔で、「ちょっとお待ち下さい」といって、広い席に案内されました。後で気付いたのですが、そのスタッフさんがわざわざ椅子やテーブルを端に避けてくれたのでした。その席に移動するときにも、レストランを出ようとしているお客さんがいたのですが、私達のために空いている席に寄ってくれて「どうぞ」と言ってくれました。このように、ちょっと角度を変えてみたら、みんながみんなただ見ているのではなく、私達を助けてくれていたことに気づきました。

姉と一緒に過ごしてきた十四年間は、姉に対する周囲の理解が少なく、辛いときもありましたが、それ以上に楽しかった記憶のほうが多いです。それは、周りの人たちに恵まれたことと、自分の両親が沢山の愛情を私達三姉妹に与えてくれたからこそです。最近の姉は、嬉しいときにははにかんでくれて、呆れるようなことを話したときにはため息をついてくれるようになりました。また、三姉妹で留守番をしているときにしか見せない、自信ありげな表情も見せてくれるようになりました。

今の私が社会に願うことは、困っているときにはスッと手を差し伸べてくれる環境であってほしいということです。確かに、困ったときには助けてくれる人もいました。ですが、ほとんどの人は見て見ぬふりをして、通り過ぎてしまうというのが現状です。

このようなことが起こる原因として、私達と同じ一人の人としてではなく、障害を持っている人、というふうに見てしまうためだと思います。確かに、私達と違って何かができない、あるいは無いかもしれませんが、でも、同じ地球で生きているのですから、私は変わらないと思っています。障害者への理解を深めることで、公平な考え方になれる社会であればいいと思います。

障害者への理解を深めるために、私自身も小学校で、総合的な学習の時間に、障害に関する調べ学習をしていました。また、文科省や大学の研究によると、障害に関する学習を受けている児童生徒は、受けていない児童生徒と比べて障害者への肯定的な考え方をもつという人が多いようです。そこで、幼い時から障害者に関する知識を身に付けていく取組が今よりも充実していった欲しいと考えます。

ここまで話してきたことはあくまで、私の家のケースであり、すべての障害者やその家族に当てはまるわけではありません。でも、今よりちょっとだけ障害者にとって過ごしやすい環境だったら、障害がある人も、ない人もともに暮らしやすい社会になることでしょう。私自身も、助けてもらった分、姉の分まで返せるように、自分から人助けができる優しい人になりたいです。困っている人を見かけたら、手を差し伸べて。

伝える

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校 3年

たにぐち てつ ま
谷口 鉄馬

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに歌ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を三度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まったばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音をすることができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままでは、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話すことができない。僕は、生まれてすぐに手術を行なった。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探した岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に一度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事を取ることもできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを覚える。何を言っても無駄だと感じて諦めるときがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそう。かわいそうと「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。「かわいそう」という言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのかもしれない。母は

「鉄馬は可哀想な子じゃない！」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまっでごめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だで」としか返せなかったけれど、両親にとっても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのことをしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせてもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうに、お金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学一年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は一つだけど、人を感動させる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。

「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。

資 料

大会のねらい

少子高齢化、国際化、情報化の急速な進展等、社会や国際的な環境が大きく変化する現代社会にあって、次代を担う少年には、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力などを身につけることが大切であることから、これらの契機となるよう、少年が社会に向けての意見、未来への希望などを発表する機会を設けるとともに、あわせて、少年の健全育成及び非行防止に対する道民の理解を深めることを目的としています。

(国際児童年の昭和54年から毎年開催)

大会のあらまし

■ 総合振興局・振興局地区大会 地区代表者の選出

■ 全 道 大 会 地区代表者16名の参加

最優秀賞 1 名（北海道・東北ブロック代表選考に推薦）

優秀賞 3 名、奨励賞12名を決定・表彰

最優秀賞・優秀賞の 4 名には「北海道コンサドーレ札幌賞」を贈呈）

■ 全国大会出場者の選出

全国 5 つのブロック（北海道・東北／関東・甲信越／中部・近畿／中国・四国／九州）毎に、都道府県代表者の主張原稿及び動画を審査し、各ブロックの代表者が選出される。

■ 全国大会

令和 7 年11月16日（日）東京都（国立オリンピック記念青少年総合センター）において開催。

各ブロックの代表者12名が参加（内閣総理大臣賞ほか各賞決定）。

審 査 員

(敬称略)

■ 審査員長

吉 本 将 樹 北海道中学校長会副会長（札幌市立稲穂中学校校長）

■ 審査員（50音順）

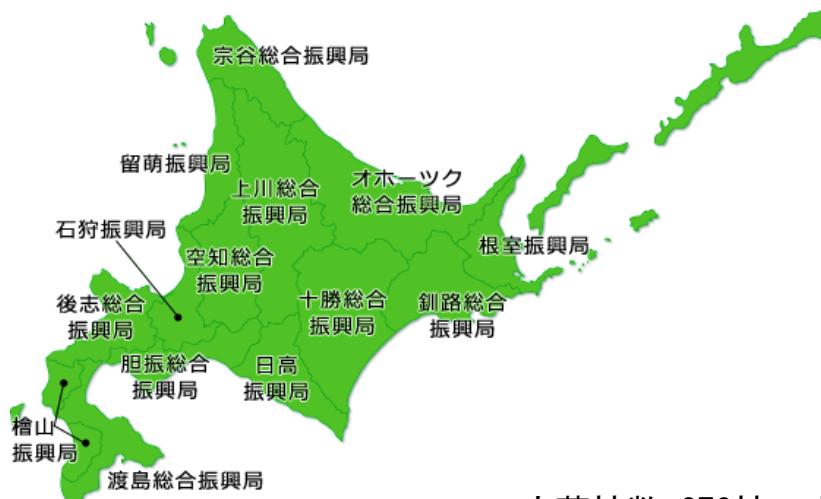
赤 木 国 香 公益財団法人 北海道青少年育成協会理事（北海道新聞社編集局くらし報道部長）

森 田 和 寿 北海道環境生活部くらし安全局地域安全課長

山 村 健 史 北海道PTA連合会事務局次長

吉 田 昌 幸 北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課 課長補佐

令和7年度「少年の主張」総合振興局・振興局地区大会開催状況



応募校数 278校 応募者数 21,531名

総合振興局 振興局名	開 催 日	開 催 場 所	参 加 校 (校)	発 表 者 (名)	審査委員 (名)	聴取者等 (名)	応募総数 (名)
空 知	7月16日	空知総合振興局	19	10	5	40	709
石 狩	7月14日	かでる2. 7	7	7	3	32	3,469
後 志	7月1日	ニセコ町民センター	4	8	5	0	8
胆 振	7月9日	胆振総合振興局	37	11	3	38	2,627
日 高	7月12日	日高振興局	14	7	5	67	1,082
渡 島	6月12日	福島町立福島中学校	16	11	4	97	841
檜 山	6月27日	江差町文化会館	10	15	3	157	424
上 川	7月18日	上川総合振興局	29	21	4	75	1,433
留 萌	7月24日	留萌振興局	8	8	5	50	82
宗 谷	7月25日	宗谷総合振興局	9	9	5	25	251
オホーツク	7月16日	網走第一中学校	20	5	4	250	943
十 勝	7月5日	よつ葉アリーナ十勝	47	18	4	45	7,255
釧 路	8月5日	釧路市立釧路小学校	36	8	5	45	1,059
根 室	7月15日	根室市総合文化会館	20	10	6	200	1,346
札 幌 市			2	2			2
合 計			278	148	61	1,121	21,531

※札幌市のみ推薦方法が異なるため、他地区と同一条件による集計ではありません。

令和7年度「少年の主張」実施要領

1 目的

少子高齢化、国際化、情報化の急速な進展等、社会や国際的な環境が大きく変化する現代社会にあって、次代を担う少年には、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力などを身につけることが大切であることから、これらの契機となるよう、少年が社会に向けての意見、未来への希望などを発表する機会を設けるとともに、あわせて、少年の健全育成及び非行防止に対する道民の理解を深めることを目的とし開催する。

2 主催

北海道、公益財団法人北海道青少年育成協会、独立行政法人国立青少年教育振興機構

3 主管

(総合)振興局地区大会は各(総合)振興局、全道大会は環境生活部とする。

4 対象

北海道内に在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの(以下「中学生」という)。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。

なお、作品は未発表、自作のものに限るので、生成AI等を利用して作文の原案を作成したり、自作の作文を推敲するなどということを行わないこと。

5 名称

少年の主張

6 実施方法等

(1) (総合)振興局地区大会

各(総合)振興局管内(札幌市を除く)の中学生を対象に主張を発表する場を設定する。

ア 実施方法

大会形式により実施する。

なお、参加者間の公平を損なわない形で、既存ICT機器を用いたりリモート方式を採用することは差し支えない。

イ 募集

- ・教育局の協力を得て、管内市町村教育委員会等を通じて、各学校に対し、周知を図る。
- ・各市町村単位、各学校単位で実施している主張大会、弁論大会等と連携した募集の他、自由公募などにより募集する。
- ・広報媒体を利用した募集に努める。

ウ 発表内容

次のような内容で、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを少年らしい自由でユニークな、飾り気のない言葉でまとめたもの。

- ・社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など
- ・家庭、学校生活、社会(地域活動)及び身の回りや友だちとの関わりなど
- ・テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想提言など

※商業的な固有名詞の使用は極力避けることとする(例えば、「〇〇にある〇〇旅館」を「〇〇にある旅館」に言い換えるなど)。

※紹介のために道具を取り入れることはできるが、審査で加点されることはないことに留意すること。

エ 発表時間

5分程度(400字詰原稿用紙4枚程度)

※全国大会の規定が、学校名、氏名、タイトル等の部分を除く「作文本文の出だし」から「作文本文の終わり」までで4分30秒～5分30秒となっているため、この範囲内に収めてください。

オ 審査

- ・関係機関等に、選考に係る審査員の推薦を依頼する。
- ・審査により、順位付けし、最優秀者1名及び優秀者2名を決定する。

カ 審査基準

(ア) 論旨

- ・鋭い感性で、新鮮な主張であるか。(中学生らしさ)
- ・新しい情報や視点があるか。

- ・ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
- ・ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
- ・ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

(イ) 論調

- ・ 主張の内容が共感と感銘を与えているか。
- ・ 説得力ある話し方であったか。
- ・ 話し振りに熱意と迫力があるか。

キ 実施月

原則として7月の「青少年の非行・被害防止道民総ぐるみ運動強調月間」に実施する。

ク 表彰

- ・ 最優秀者1名及び優秀者等に対して賞状等を授与する。
- ・ 表彰に当たっては、賞状の他、副賞の授与など、地域の実情等に応じ、予算の範囲内で工夫して差し支えない。

ケ 推薦

最優秀者を全道大会参加者として、8月1日(金)までに、環境生活部に推薦する。最優秀者が参加できない場合は、次位の者を推薦する。

コ その他

別添の地区大会実施要領案を適宜変更して要領を定める。

(2) 全道大会

(総合)振興局からの推薦者各1名及び札幌市中学校長会からの推薦者2名を対象に主張を発表する場を設定し、審査を実施し、最優秀者(1名)及び優秀者(3名)を選考する。

ア 実施方法

大会形式により実施する。

イ 発表内容・発表時間

(総合)振興局地区大会と同様とする。

ウ 審査・選考

- ・ 審査は、関係機関等から推薦された審査員が発表原稿及び大会当日の発表により実施する。
- ・ 審査基準は、(総合)振興局地区大会と同様とする。
- ・ 審査により順位付けし、最優秀者及び優秀者(以下、「入賞者」という。)を選考する。
- ・ 審査結果は、公益財団法人北海道青少年育成協会のホームページ上で発表する。

エ 実施月日

8月29日(金)開催の「北海道青少年育成大会」において実施する。

※また、全道大会で撮影した主張を、公益財団法人北海道青少年育成協会のホームページ上で、一定期間公開する。

オ 表彰

入賞者には、全道大会席上で賞状及び副賞を授与し、入賞者以外の主張発表者には奨励賞を贈呈する。

カ 全国大会への推薦

全道大会最優秀者を全国大会出場候補者として、独立行政法人国立青少年教育振興機構に推薦する。最優秀者が全国大会に出場できない場合は、優秀者のうち次位の者を推薦する。

キ その他

主張発表者には、道から全道大会参加に係る旅費を支給する。また、主張発表者の引率者(1名)には、公益財団法人北海道青少年育成協会から全道大会引率に係る旅費を支給する。

7 その他

- ・ 主張発表者の原稿は400字詰原稿用紙(A4)縦書きで、本人自筆による原本(障がい等による場合はワープロ可)とする。

※異なるサイズの場合、A4サイズに書き直した原稿が必要となりますので、ご注意ください。

- ・ 応募された作品は、原則返却しないこととし、北海道に帰属するものとする。
- ・ 原稿の書き出しについては次のとおりとす

4 行 目	3 行 目	2 行 目	1 行 目
作 文 ～		北 海 道	タ イ ト ル
		学 校 名 前	
		学 年	

「少年の主張」全道大会 歴代最優秀賞並びに優秀賞受賞者名簿

年度	最優秀賞(北海道知事賞)		全国大会	優秀賞(北海道教育委員会教育長賞)S60～		優秀賞(北海道PTA連合会会長賞)S60～	
				優秀賞(北海道青少年育成協会会長賞)H22～			
S54	利尻町立杓形中学校	池原 広文	出 場 総務長官賞受賞				
S55	根室市立光洋中学校	小林 優美	出 場				
S56	様似町立様似中学校	川上 美穂子					
S57	初山別村立豊岬中学校	高橋 未央	出 場				
S58	鹿追町立鹿追中学校	最上 佐緒里					
S59	厚沢部町立厚沢部中学校	後 藤 晃					
S60	和寒町立和寒中学校	高岡 智扇		札幌市立手稲東中学校	庄田 香織	更別村立更別中央中学校	西川 朋憲
S61	小平町立達布中学校	紅 屋 優		美唄市立美唄中学校	堀川 卓郎	稚内市立稚内南中学校	山崎 直美
S62	鶴川町立鶴川中学校	伊藤 奈美	出 場	音更町立音更中学校	佐々木 詩津子	和寒町立和寒中学校	岡本 百里
S63	砂川市立豊沼中学校	小林 ますみ		増毛町立増毛第二中学校	上坂 奈緒美	更別村立更別中央中学校	竹 川 暢
H 1	江差町立江差中学校	中川 昌子		釧路市立鳥取西中学校	薄井 理砂	別海町立中西別中学校	臼井 貴之
H 2	鹿追町立瓜幕中学校	高橋 恵美子		旭川市立広陵中学校	三浦 愛子	初山別村立有明中学校	新田 千佳子
H 3	稚内市立稚内東中学校	森 田 淳		中札内村立中札内中学校	中西 志香	美幌町立美幌中学校	飯島 紀子
H 4	弟子屈町立弟子屈中学校	横 川 心	出 場 文部大臣賞受賞	白老町立虎杖中学校	中村 有希子	江別市立江北中学校	藤城 正興
H 5	生田原町立生田原中学校	仁木 利沙子		浦河町立浦河第一中学校	高田 牧生	別海町立中西別中学校	林 美 穂
H 6	生田原町立生田原中	前島 由衣	出 場	旭川市立六合中学校	中村 沙織	余市町立西中学校	高山 仁美
H 7	幕別町立糠内中学校	中村 郁洋	出 場	標茶町立磯分内中学校	岡崎 奈未子	札幌市立新陵中学校	出林 裕佳
H 8	滝川市立明苑中学校	紺野 友里子	出 場	標茶町立磯分内中学校	藤本 智子	富良野市立山部中学校	寺井 正美
H 9	中標津町立広陵中学校	谷 口 麻衣		七飯町立大中山中学校	竹安 玄太	苫前町立古丹別中学校	中嶋 卓広
H10	本別町立勇足中学校	岡本 あすか		札幌市立北都中学校	野 原 梓	天塩町立啓徳中学校	大岩 奈々恵
H11	根室市立柏陵中学校	分部 史織		江差町立江差中学校	柴 田 優	中富良野町立中富良野中学校	杉 原 咲
H12	稚内市立宗谷中学校	熊谷 慶子	出 場	釧路市立北中学校	大井 里紗	北広島市立西部中学校	畠山 直子
H13	新冠町立新冠中学校	中村 みなみ		虻田町立虻田中学校	佐々木 千恵	猿払村立拓心中学校	藤井 美咲
H14	共和町立共和中学校	本間 絵美		釧路市立武佐中学校	佐藤 くる美	恵山町立東光中学校	佐藤 亜未
H15	釧路市立美原中学校	佐藤 妃奈		岩見沢市立上幌向中学校	森谷 紀治	歌登町立志美宇丹中学校	渡辺 のぞみ
H16	熊石町立熊石第二中学校	山脇 恭子		上富良野町立東中中学校	熊谷 佳苗	鶴居村立鶴居中学校	木村 友紀

年度	最優秀賞(北海道知事賞)		全国大会	優秀賞(北海道教育委員会教育長賞)S60～		優秀賞(北海道PTA連合会会長賞)S60～	
				優秀賞(北海道青少年育成協会会長賞)H22～			
H17	新十津川町立新十津川中学校	三吉 莉湖		歌登町立歌登中学校	金子 佳美	せたな町立大成中学校	正村 早紀
H18	北斗市立石別中学校	山田 亮一	出 場	岩内町立岩内第一中学校	松山 亜莉紗	枝幸町立志美宇丹中学校	渡辺 ともみ
H19	枝幸町立志美宇丹中学校	渡辺 ともみ		当別町立西当別中学校	萩原 有希	伊達市立長和中学校	本田 舞音
H20	岩内町立岩内第一中学校	熊野 遥華		幌延町立間寒別中学校	佐藤 慎之介	池田町立池田中学校	新居 詩穂
H21	寿都町立寿都中学校	石王 凱騎		礼文町立香深中学校	中島 佳奈子	千歳市立富丘中学校	中田 翔哉
H22	遠軽町立生田原中学校	阿部 愛		北海道教育大学付属釧路中学校	恒川 礼奈	増毛町立増毛中学校	加藤 修人
				帯広市立清川中学校	横山くるみ		
H23	別海町立中西別中学校	盛合 樹		苫前町立古丹別中学校	永井 星奈	釧路市立幣舞中学校	田名部 あゆみ
				栗山町立栗山中学校	濱谷 珠美		
H24	猿払村立拓心中学校	熊谷 春奈		厚岸町立真龍中学校	山田 唯	札幌市立月寒中学校	安田 りな
				遠別町立遠別中学校	丸山 美月		
H25	帯広市立川西中学校	畠山 優輝		札幌市立平岡中央中学校	高野 大河	釧路市立鳥取西中学校	米内 貴志
				江別市立江別第二中学校	最知なるみ		
H26	稚内市立稚内南中学校	熊谷 七海		釧路町立富原中学校	山岸 永和	帯広市立帯広第五中学校	深町 陽奈
				鷹栖町立鷹栖中学校	高木 倖風		
H27	北海道教育大学附属札幌中学校	前田 ほの香		千歳市立勇舞中学校	山田 萌未	帯広市立川西中学校	西野 侑未
				苫小牧市立緑陵中学校	吉岡 美月		
H28	白糠町立庶路中学校	松橋 愛美		豊富町立豊富中学校	伊藤 佑茉	標津町立標津中学校	上田 礼芽
				長沼町立長沼中学校	倉田 友美		
H29	白糠町立白糠中学校	阿部はるか		芦別市立啓成中学校	渡部 胡桃	旭川市立神居東中学校	若林 千夏
				新ひだか町立静内第三中学校	坂本安侑子		
H30	洞爺湖町立洞爺中学校	毛利 郁也		厚岸町立真龍中学校	車塚 花瑠香	岩見沢市立東光中学校	藤塚 麗瑠
				中標津町立広陵中学校	楓川 奈央	美幌町立北中学校 (北海道150年記念特別賞)	田元 克
R 1	登別明日中等教育学校	小路 藍花		帯広市立帯広第四中学校	吉田 千玲	北斗市立茂辺地中学校	房田 心玖
				岩見沢市立清園中学校	谷内 楓		
R 2	新型コロナウイルス感染症の影響により、「少年の主張」事業を中止						
R 3	洞爺湖町立洞爺中学校	吉野 真帆		厚岸町立真龍中学校	伊藤 琉希	美幌町立北中学校	中山 芽依
				和寒町立和寒中学校	佐藤 莉子		
R 4	江別市立大麻東中学校	金 美怜	出 場	中標津町立中標津中学校	藤浪 あい	長沼町立長沼中学校	岸 楓珂
				厚沢部町立厚沢部中学校	細畑 綾香		
R 5	下川町立下川中学校	三浦 かな	出 場 審査委員会 委員長賞受賞	札幌市立宮の丘中学校	中川 心結	厚真町立厚南中学校	笠原 桜空
				岩見沢市立明誠中学校	内崎 いおり		
R 6	恵庭市立恵み野中学校3年	数馬 灯里		札幌市立平岡緑中学校	鎌田 千弦	鶴居村立鶴居中学校	藤原 拓也
				岩見沢市立明成中学校	尾坂 空音		

令和7年度
「少年の主張」全道大会発表作品集

発行 公益財団法人北海道青少年育成協会
〒060-0005

札幌市中央区北5条西6丁目1-23

T E L 011-231-6451

U R L <http://www.ikuseikyo.jp/>

M A I L youth@ikuseikyo.jp

こどもたちに 読んでほしい200冊

よい本で
美しい心
強い心

どさんこ
読書応援
キャンペーン!

こどもたちに本をプレゼント
するキャンペーン実施!
詳しくはこちらから▶



令和7年度
200冊目録は
こちらから

令和7年度
新しく選ばれた
52冊はこちら



こどもたちに
読んでほしい
200冊

北海道の先生がおすすめする本



幼児の部



ぼくのペンギンは
どこ?
サム・アッシャー(作・絵)
【徳間書店】



わらってよピッコ
ルイス・スロドキン
(絵・作)
【福音館書店】



となりのじいちゃん
かんざつにつき
ななもり さち子(作)
たまふ(絵)
【理論社】



おちば
おーなり 由子(文)
はた こうしろう(絵)
【ほるぷ出版】



いい一日って
なに?
ミーシャ・アーチャー(作)
【BL出版】



いのちが
かえていくところ
最上 一平(作)
伊藤 秀男(絵)
【童心社】



ぼくのなみは
なにでできてるのか
かさい まり(作)
おとない ちあき(絵)
【金の星社】



クラゲのくらし
水口 博也(著)
【少年写真新聞社】



ひろい海に
ぼくたちは生きている
長倉 洋海(文・写真)
【アリス館】



はじめましての
ダンネバード
工藤 純子(作)
マコ カワイ(絵)
【くもん出版】

小学校高学年の部



ぼくとロボ型
フレンド
サイモン・パッカム(著)
【あすなろ書房】



ぼくたちのことを
わすれないで
ロビン・ジャコブ・ハーランド(著)
由美村 穂々(作)
鈴木 まもる(絵)
【佼成出版社】



とどけ! ボール
つなごれ!
ぼくらの言葉
村上 晃一(著)
【あかね書房】



光の粒が舞いあがる
蒼沼 洋人(著)
【PHP研究所】



わたしは
食べるのが下手
天川 栄人(作)
【小峰書店】



僕は猛禽類の
お医者さん
齊藤 慶輔(著)
【KADOKAWA】



水辺のワNDER
〜世界を旅して未来を考えた〜
橋本 淳司(著)
【文研出版】



愛ちゃんの
モテる人生
宇井 彩野(著)
【河出書房新社】



ソ連兵へ差し出された
娘たち
平井 美帆(著)
【集英社】



イチから分る
北方領土
【北海道新聞社】

中学生の部

高校生・青年の部

公益財団法人 北海道青少年育成協会
選定協力=北海道学校図書館協会 北海道読書推進運動協議会

他の200冊の情報は、ホームページでご覧いただけます。
ホームページ <http://www.ikuseikyo.jp/>

LINE

LINE登録はこちら

バーコード読み取り機能で右のコードを読み取って表示されたアドレスから登録できます。

